

データ活用を一過性で終わらせない！ ～データ駆動型の意思決定を実現するデータ 基盤構築ノウハウ～

2026年9月25日

パナソニック デジタル株式会社

アナリティクスプラットフォーム統括部 プラットフォームソリューション部

北村 拓朗



2つの事例が示したこと

セッション2の2つの事例 —— 鳥の目で「どこを直すか」、虫の目で「なぜ起きるか」

事例① 業務プロセスを俯瞰する

プロセスマイニング / BPM

- 1 E2Eの製造プロセスと実リードタイムを可視化
- 2 工程内タクトタイム・工程間待ちを深掘りし改善対象を特定
- 3 施策後の効果を数値で監視し、次の改善へ戻す

事例② 設備と現象を深掘る

予知保全 / 真因分析

- 1 三現（現場・現物・現実）に根差した仮説構築
- 2 適切な粒度・間隔でデータを再取得しFFTで特徴量を抽出
- 3 分析結果を現場の知見と結びつけ、指標化する

共通点① 現場の理解とデータが結びついて初めて真因に届いた / 共通点② 成果が出ると必ず「次の問い」が生まれた

他の設備でも、他のラインでも使えないか —— その問いに答え続けるのが基盤

成果の後に現れる壁

個別の成功を、別工程・別ライン・別拠点へ広げようとしたときに何が起きるか

収集のやり直し

新しいテーマごとに
データ収集から着手

粒度・定義の不一致

工程・拠点ごとに
単位も周期も異なる

所在の属人化

どこに何があるか
分析者しか分からない

監視が続かない

手作業では改善前後を
同じ基準で追えない

その結果、経営・現場で起きること

工程をまたぐと
数字が繋がらない

定義・粒度・時点が揃わない



原因分析の前に
データ確認が始まる

どの数字が正しいかの確認に時間が消える



改善と経営判断が
遅れる

打ち手ではなく確認に工数を使う

これはデータ整備の問題ではなく、改善サイクルの速度と、経営判断の確度の問題

PoCの成功を「組織の改善能力」へ —— 信頼できるデータを繰り返し届ける仕組み

今日、お持ち帰りいただきたいこと

1

データ基盤 = 経営インフラ

単なるIT投資ではなく、経営の意思決定を支えるインフラである

2

止まる理由は「3つ」の要素

IT基盤だけでも、人だけでも、文化だけでもなく、3つが並列に影響し合っている

3

基盤設計の軸は SSOT と論理統合

「使われ続けること」を前提に、SSOTと論理統合を軸に設計する

前半2セッションの取り組みを「続け、広げる」ために何が必要か —— この3点が今日の持ち帰りです

工程ごとのIT乱立・サイロ化 —— 典型的な実態

各工程・各拠点のニーズによりITシステムが乱立 —— 属人化・サイロ化が進む

プロセス	需要予測・生産計画	調達	製造	品質・検査	出荷・保守
課題	データやオペレーションの属人化・サイロ化				
	計画情報の 属人管理	調達・在庫情報の 分断	設備データの サイロ化	品質データの 個別管理	事後対応中心の 保全
データ	・ 需要予測 ・ 生産計画 ・ 製品・工程マスタ	・ 発注情報 ・ 入荷実績 ・ 在庫データ	・ 設備稼働ログ ・ 作業実績 ・ センサーデータ	・ 検査結果 ・ 不良情報 ・ 測定値	・ 出荷実績 ・ 保全履歴 ・ 稼働停止記録
システム	工程・拠点ごとに複数のITが乱立				
	需給計画システム	購買システム	MES	品質管理システム	出荷管理システム
	Excel・紙の計画表	在庫管理（WMS）	PLC・IoTゲートウェイ	検査帳票（紙）	保全管理（CMMS）
活用	生産管理部門	調達部門	製造部門	品質保証部門	保全・物流部門



現場にデータは大量にある —— しかし工程をまたいだ利活用ができていない

工程単位では最適化されていても、製造プロセス全体ではデータがつながっていない

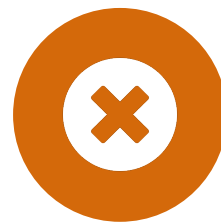
基盤が弱いと —— 経営現場で何が起こるか

数字が合わない



工程・拠点ごとに定義
・集計タイミングが違う

確認が始まる



会議冒頭で
「どの数字が正しいか」

判断が遅れる



意思決定ではなく
「確認」に時間が消える

現場：数字合わせに時間・エネルギーを消費 / 経営：確証のないまま判断を迫られる —— 二重のコスト



現場が頑張っても確証が持てない —— 経営が自信を持って判断できない状態が続く

ただし、データ基盤があるだけでは成果は出ない

基盤は「必要条件」ではあるが「十分条件」ではない



基盤はある。でも使われない



DWHを構築した



BIツールも導入した



でも現場が使わない



ダッシュボードはある。でも変わらない



画面はある



データも正しい



でも会議の運用が変わらない



分析できる人はいる。でも広がらない



一部の人は使える



「いつもの人」だけが見る



結果として属人化

基盤整備が「作って終わり」にならないために —— では、何が足りないのか？

データ活用は「3つの柱」で成り立つ



3つは並列要因 —— どれが欠けても止まる。直列ではなく、同時に噛み合うことが条件

カルチャーの変革



Data Culture

業務や経営意思決定のプロセスにおいて
データを重視するマインドや行動が根付いている状態

カルチャーと
人材

データ活用への経営層の直接関与

未来を予測するデータ活用へステージを変える

オペレーティング・モデルの変革



Data Literacy

ツールを利用してデータの可視化や分析を行える
基本スキル・知識を誰もが有する状態

組織間連携

共通の活用スキームやプラットフォームの重要性

データ活用・分析における目的の明確化

ITの変革



Data Management & Infrastructure

常に必要最大限のデータが蓄積され、利用者にそれらの所在・
意義が公開され、スピーディにデータの取り出しが可能な状態

データ
マネジメント

プロセスの標準化とMDMの重要性

SSOT (Single Source of Truth)

データオーナー・データスチュワードの定義

組織間連携

共通の活用スキーム・プラットフォームの重要性

三つが同時に噛み合ったときにだけ、データ活用は回り続ける

ここからのご説明内容：IT変革（データ基盤）



Data **Culture**



Data **Literacy**



Data Management
& Infrastructure

今日のメインピック

「基盤だけが大事」と言いたいではありません。

今日は、三つの柱のうち、私が責任を持つ領域を整理します。

今日カバーする内容：



SSOTとは何か



論理統合とはどういう設計か



基盤が担うべき役割

基盤の役割を一言で言うと



「正しいデータを、同じ定義で、
必要な人が、必要なタイミングで、
迷わず使える状態にすること」

NOT

高度な分析そのもの



BUT

意思決定の前提を揃えること

NOT

データを増やすこと



BUT

信頼できる 1 つの数字を確立すること

前提が揃って初めて、文化もリテラシーも成果に変わる

SSOT —— 唯一正しいデータを確立する

SSOT = Single Source of Truth

SSOT がない状態

- ❌ 「売上」の定義がバラバラ
- ❌ 会議に持ち込む数字が部門ごとに違う
- ❌ 議論は必ず「正しさの確認」に戻る
- ❌ データが増えるほど混乱が増す



SSOT がある状態

- ✅ 全社で「この数字」が共通認識
- ✅ 会議冒頭の確認がなくなる
- ✅ 議論が「なぜ」「次に何を」に集中
- ✅ 経営が自信を持って言い切れる

ただし、定義を決めるだけでは不十分 —— 数値加工パイプラインの自動化が「確証」を生む

SSOT

"何を正しいとするか" の定義を揃える



自動化

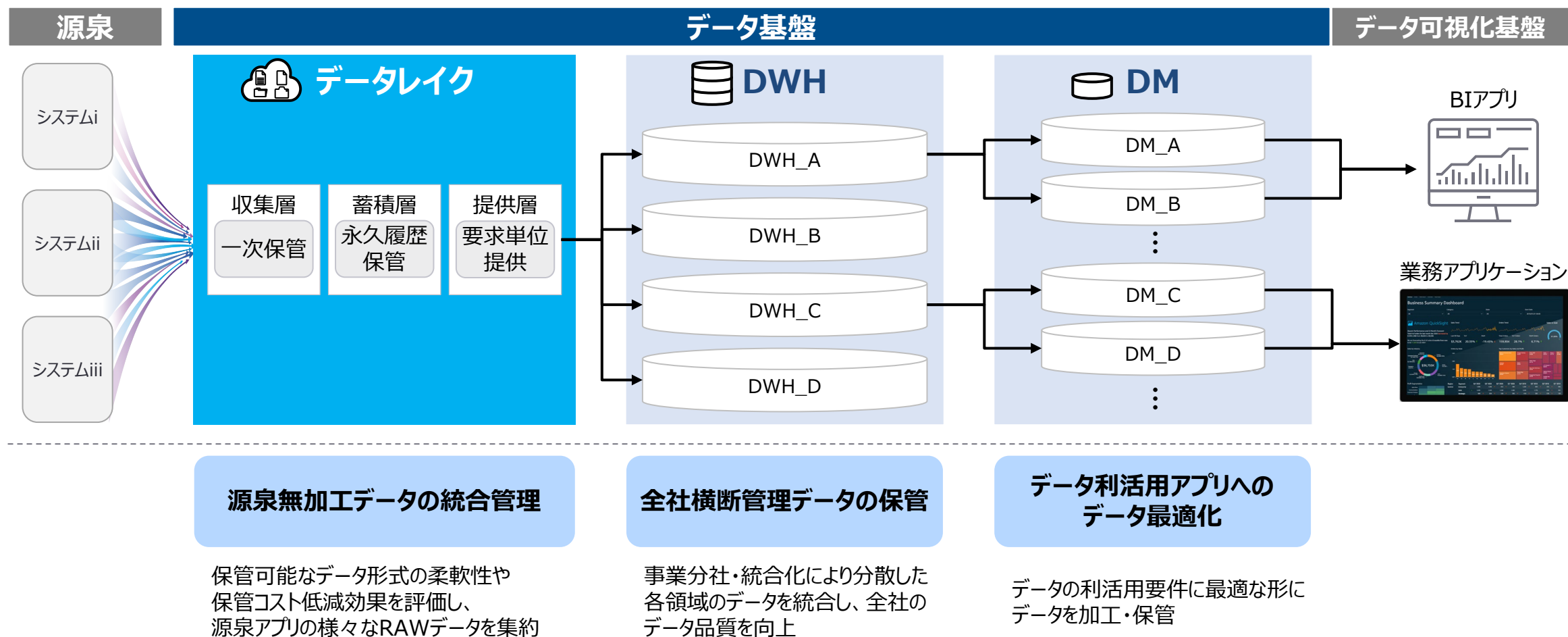
"定義通りに毎回正しく計算される" を仕組みで担保する

💡 二つが揃って初めて —— 「誰が・いつ見ても、同じ数字」が経営の確証になる

✓ SSOTの原則のもと、 「唯一正しいデータ」を一つの基盤に集約

SSOT とは？

→「Single Source of Truth（信頼できる唯一の情報源）」の略称。
信頼できるただ1つのソースを確立することで、情報の一貫性と正確性を確保し、組織内の全員が同じデータに基づいてビジネスの意思決定を行うことを保証するために使用される概念。



論理統合 —— 物理的にバラバラでも経営からは一つ

Logical Integration —— 物理的に一つにしないでいい。経営からは一つに見える設計

なぜ物理統合ではなく論理統合か

- ❌ 現場には多くの既存システムがある
- ❌ 地域ごとに規制・制度が違う
- ❌ IT側の都合で全部を一つの箱に → 失敗しやすい

→ だから



データカタログで「論理的に統合」

物理的には分かれていても、見え方は一つ

経営からの見え方



一つのデータ基盤

物理的な実体

基幹系DB

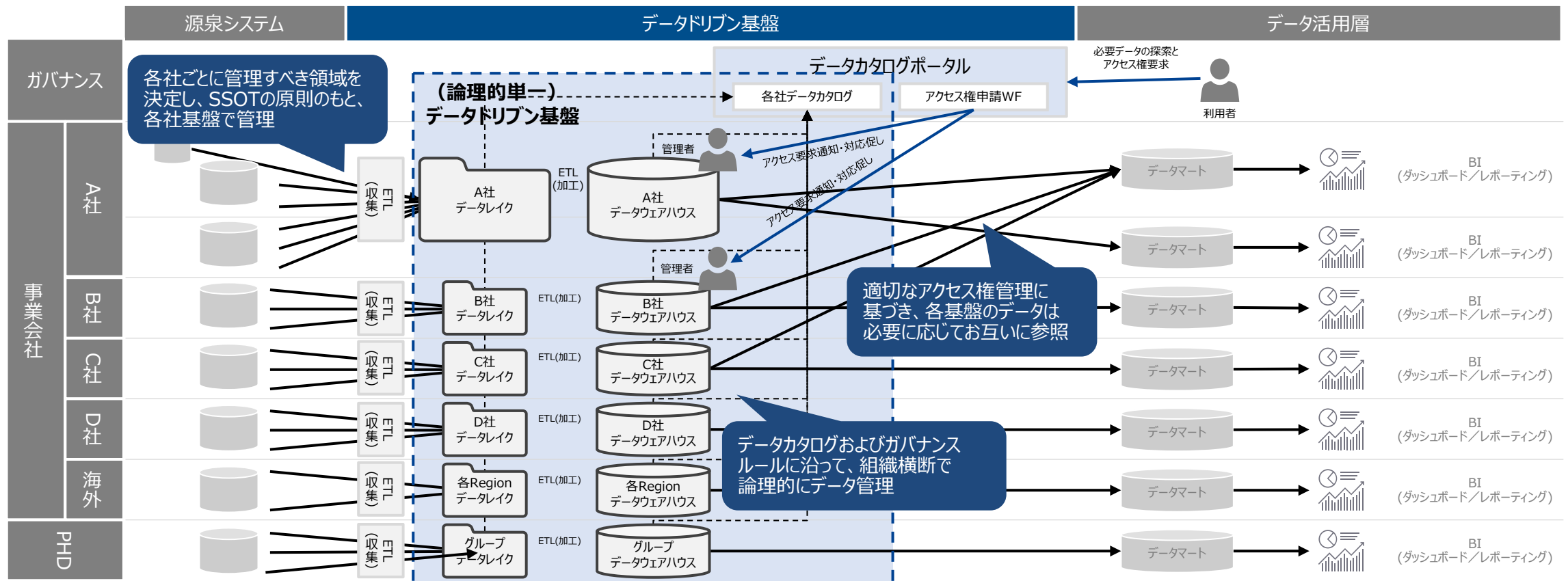
DWH

クラウド
ストレージ

データカタログ（論理統合層）

グローバル・分社環境で現実的に効くやり方

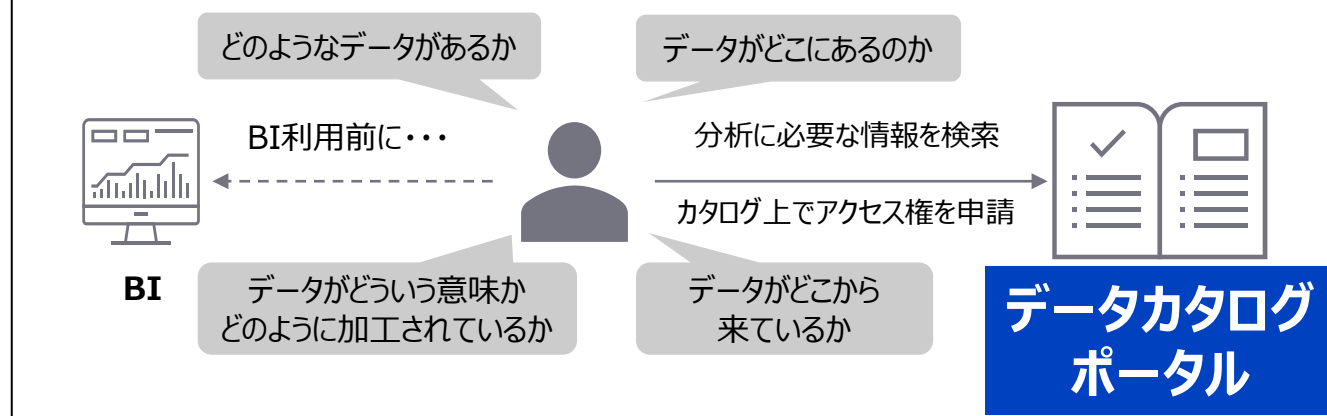
- ✓ IT部門側の都合で、無理に一つの環境に統合はしない
- ✓ データカタログで、基盤とデータを論理的に統合
- ✓ データのガバナンスを効かせる体制・プロセスを検討



データカタログで基盤に蓄積されたデータの所在・定義を統合管理し、公開する

カタログ利用シーン

データの所在・定義等の情報を一元管理・公開し、ユーザーは欲しいデータを自分で検索
アクセス権の申請も標準化することでデータ利活用を推進



以下の要素を登録・公開するサイト

データの一覧

蓄積されているデータの一覧情報

データの所在

データがどこから発生し（データの出自）、
どのように変化し（データの加工処理内容）、どこに格
納されたか（データ格納先・提供先）の情報

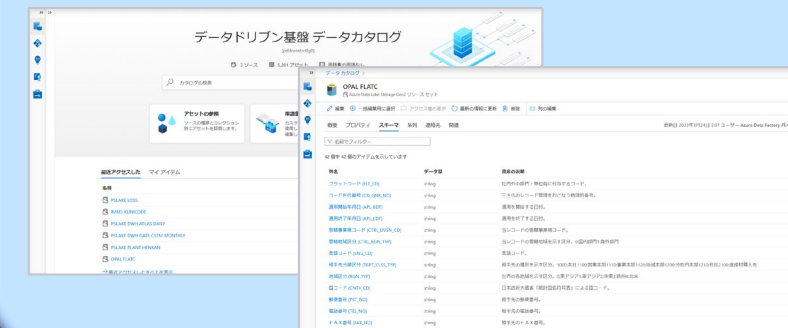
データの意味

データの業務的・システムの意味や状態を説明する
情報



Microsoft Purview

組織がデータ資産を管理、保護するのに役立つAzureの包括的なデータガバナンスソリューションであり、データカタログ機能、データリネージュ機能、アクセス権申請WF、データ利用状況レポート、データセキュリティ・ガバナンスリスク警告など様々な機能を併せ持つ



経理部門とも連携し、業務ユーザー視点で馴染みのあるビジネス用語・理解容易性を意識した説明文を付与

データドリブン基盤 データカタログ

組織名

組織名

組織名

ビジネスユーザー向けデータ

生産-PSI

財務会計



用語集の用語①

pddrvn_glossary

勘定科目別

商品別

月次

組織別

見通し

用語集の用語

pddrvn_glossary

勘定科目別

商品別

月次

組織別

見通し

列名	用語集の用語	データ型	列の説明
ND	年度	nvarchar	集計年度
CATEGORY	業務カテゴリ	nvarchar	集計業務カテゴリ(前年実績・計画・〇月見通し等)
TIME	期間	nvarchar	期間コード
DATASRC	データ種類	nvarchar	データ種類(IFRS調整後を示す1種のみ)
ENTITY	組織	nvarchar	組織コード
ACCOUNT	勘定科目	nvarchar	勘定科目コード
INTCO	相手先	nvarchar	相手先コード(特定の相手を示さないALL_INTCO1種のみ)
INPCURR	入力通貨	nvarchar	入力通貨コード(特定の通貨を示さないTOTAL_CURR1種のみ)
RPTCURR	換算後通貨	nvarchar	換算後通貨コード(JPY[日本円]、LC[現地通貨]、JPY_LYEAR[前年レート]、JPY_BPALN[計画レート]の4種)
PRODUCT	商品カテゴリ	nvarchar	商品カテゴリ(特定の商品を示さないALL_PRODUCT1種のみ)
NUMDATA	数値データ	decimal	数値(金額・人員)
BCO_NM	分社名	nvarchar	分社名(マスタにより組織コードを補足)
J_NM	事業部名	nvarchar	事業部名(マスタにより組織コードを補足)
BU_NM	BU名	nvarchar	BU名(マスタにより組織コードを補足)
HIN_NM	商品名	nvarchar	商品名(マスタにより組織コードを補足)
EVANET_NM	EVA-Net名称	nvarchar	上の拠点名称(参照不要)
ME	名称	nvarchar	拠点名称(Eva-Net名称や書式を調整・補足したもの)。拠点名称は本項目をご確認ください。
INPT_KYN_NM	入力通貨	nvarchar	上の拠点名称(参照不要)
LCTN_NM	所在地名	nvarchar	所在地名(マスタにより補足) 上の情報をベースに補足
CNTY_NM	国名	nvarchar	国名(マスタにより補足) 上の情報をベースに補足
KMK_BRI_NM	科目分類名	nvarchar	科目分類名(マスタにより勘定科目コードを補足)
AC_NM	勘定科目名	nvarchar	勘定科目名(マスタにより勘定科目コードを補足)
AC_DTL_NM1	勘定科目詳細①	nvarchar	勘定科目詳細①(マスタにより勘定科目コードを補足)
AC_DTL_NM2	勘定科目詳細②	nvarchar	勘定科目詳細②(マスタにより勘定科目コードを補足)

BI・AI双方のニーズを満たす、唯一のデータ基盤

① 品質の一元保証

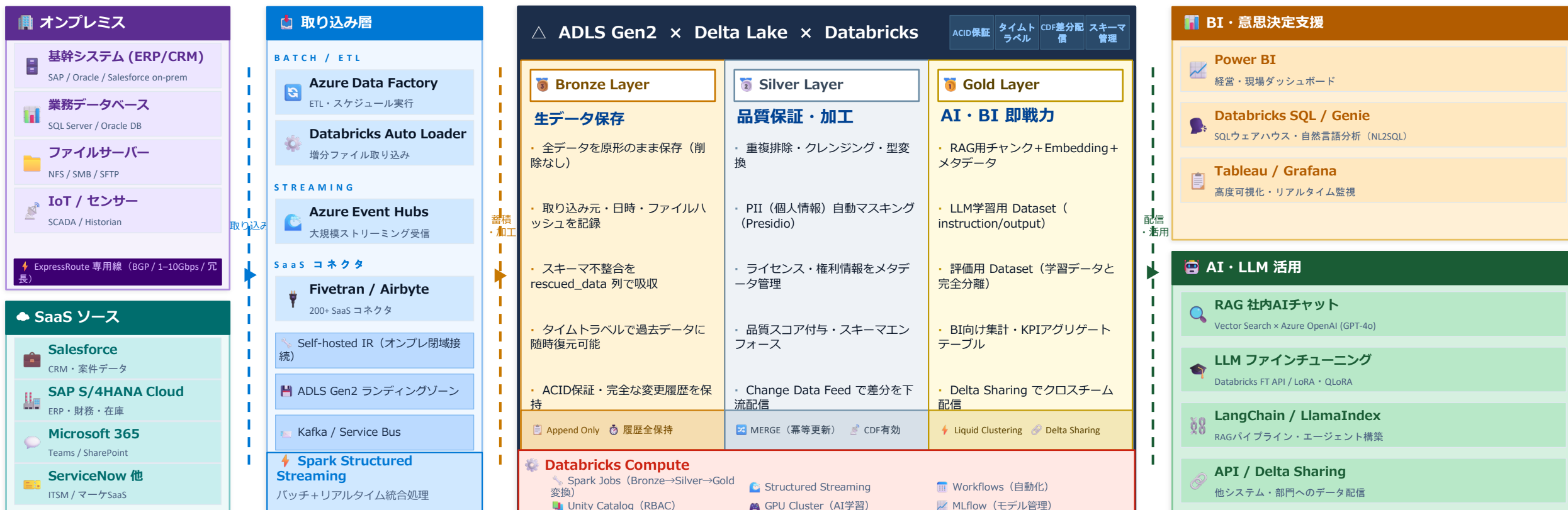
Silver層のクレンジング/スキーマ管理/品質スコアリングがBI正確性とAIの精度を同時担保

② 鮮度の自動維持

Change Data Feedの差分更新でダッシュボードとRAGインデックスを常に最新化

③ ガバナンスの内包

Unity Catalog/RBAC/データリネージで「使えるデータ」「守られたデータ」両立



会議が変わる —— Before / After

観点	BEFORE	AFTER
会議冒頭	各現場が事前に必死に数字を合わせる 会議では確証のない数字が並ぶ	定義通りに自動集計された数字が揃う 全員が同じ前提から議論を始める
議論の中身	「次回までに確認します」で終わる 本質的な判断が先送りに	「なぜこうなったか」 「次に何を打つか」に集中
経営の時間	確認コスト・すり合わせコストが高い 判断のスピードが落ちる	前提が揃っている状態で議論 意思決定のスピードが上がる



この左右の差を生むのは設計の思想。SSOT・パイプライン自動化・論理統合が揃って、会議が、そして組織が変わる

今日のまとめ —— 持ち帰り 3 点

1



止まる理由は「3つ」の要素

人・文化・IT基盤のどれか一つではなく、三つが並列で影響し合っている

2



基盤が担うのは「前提を揃えること」

分析することではなく、意思決定の前提を揃えることが基盤の価値

3

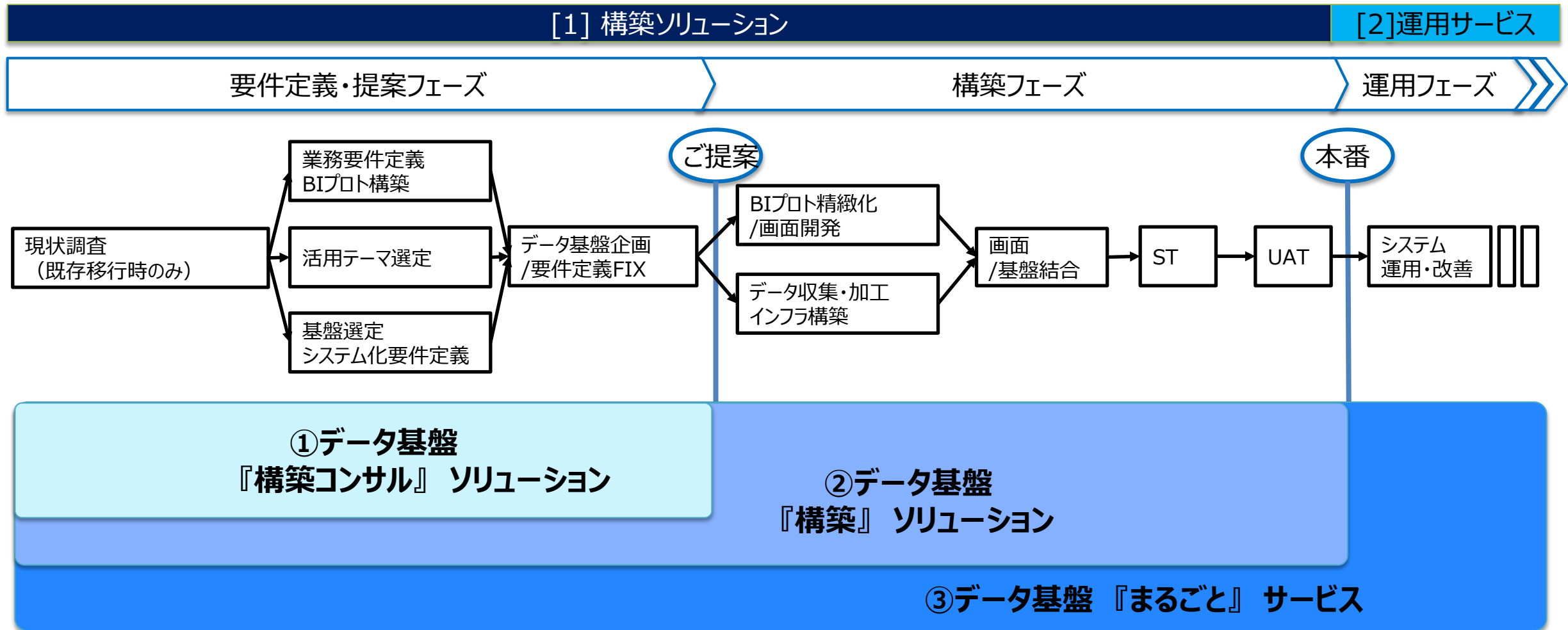


前提を揃える鍵は SSOT と論理統合

「この数字で判断する」と言い切れる状態と、物理的バラバラを論理的に一つにする設計

プロセスの可視化も、設備の真因分析も、「回り続ける取り組み」にして初めて経営成果になります

データ基盤の企画／開発／運用／改善をワンストップでご支援





Panasonic